

# 人生100歳時代を生きる子どもたちのために

—地域学校協働活動と社会教育の役割—

牧野 篤  
(東京大学大学院教育学研究科)

## 社会の構造的な変化

⇨産業構造の変化・人々の価値観の変容  
少子高齢人口減少社会の到来  
人を国民（個体・集団）として扱う社会  
から個人（関係・集合）として扱う社会へ

・・・政治の私物化と官僚機構の劣化

## 新しい社会への身もだえ

新たな自治を構想する必要  
主権者としての子ども（18歳参政権、18歳成人）

〈学び〉の社会=常に多様な価値をつくりだし続ける  
すべての人々がアクターとなる社会へ

## A. 人生100歳社会へ

# 少子高齢人口減少社会

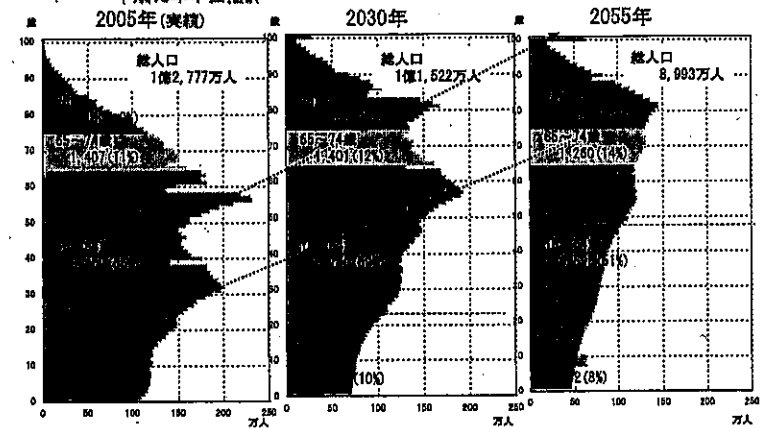
から

人生100歳社会へ

## 少子高齢化・人口減少の急激な進展

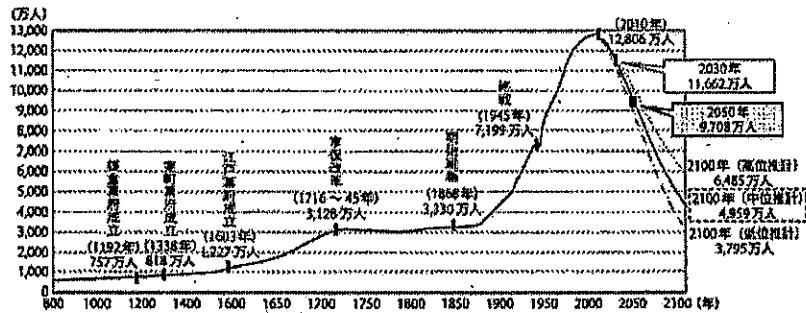
高齢者人口の高齢化

—平成18年中位推計—



注:2005年は国勢調査結果、総人口には年少子孫人口を含むため、年齢階級別人口の合計と一致しない。

## 人口の長期変動：急激な増加と急激な減少



資料) 2010年以前は総務省「国勢調査」、同「平成22年国勢調査人口等基本集計」、国土庁「日本列島における人口分布の長期予測別分册」(1974年)、2015年以降は国土社会政策・人口問題研究所「日本の将来推計人口(2012年1月推計)」より国土交通省作成

平均寿命：男81歳 女87歳 (2016年) 現在  
2016年 死亡最頻年齢 男83歳 女90歳

2007年生まれの子どもたちの平均寿命は107歳  
2007年生まれの子どもたちの半数が107歳以上生きると予測

これまでの社会教育・生涯学習実践でよいのか？

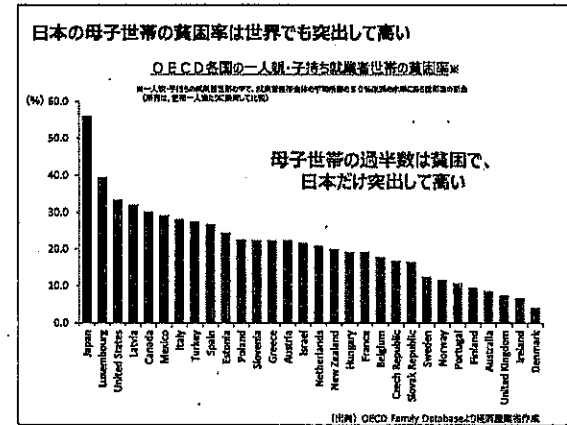
ライフステージ  
ライフコース  
ライフサイクル



マルチステージ

学校が福祉機関化している.....

### その裏で..... 子どもの貧困



子どもの  
相対的貧困率：17%  
ひとり親家庭：57%

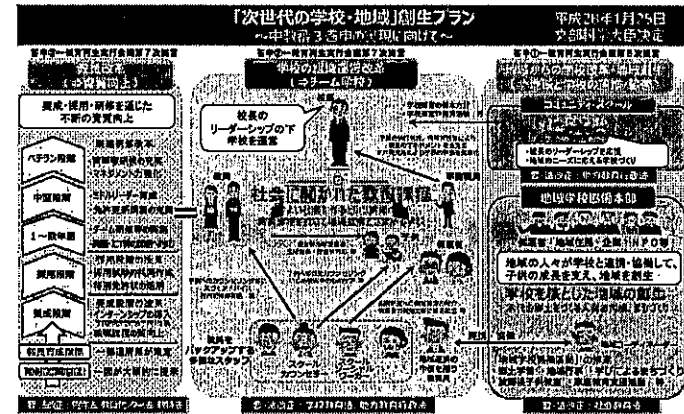
「子ども食堂」  
2286カ所

[http://www.meti.go.jp/committee/summary/elc0009/pdf/020\\_02\\_00.pdf](http://www.meti.go.jp/committee/summary/elc0009/pdf/020_02_00.pdf)

B. 〈学び〉 概念を刷新する



一つの方策としてのコミュニティ・スクール  
 地域学校協働活動  
 ⇨地域学校協働本部



「次世代の学校」の創生に必要な不可欠な教職員定数の戦略的充実  
 子供たちが自立して活躍する「一億総活躍社会」「地方創生」の実現

公教育とは

個人の成長・発達・幸せと

持続可能な社会の構築を

媒介して

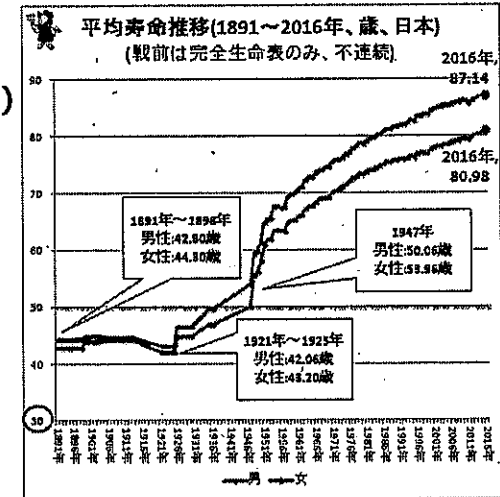
二つながらに実現するもの

C. いい社会を活かせない

少子高齢人口減少社会は問題なのか？

日本人の平均寿命  
(1891年～2016年)

100年前の2倍



<http://www.garbagenews.net/archives/1940398.html>

生まれたら誰もが大きくなれ、長生きできる社会

結果としての少子高齢人口減少

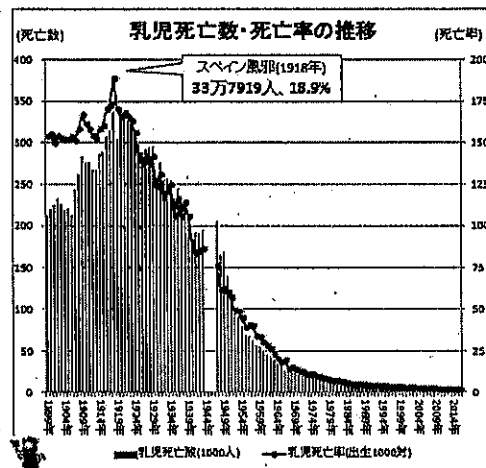
いい社会なのでは？

いい社会を使いこなせない

1000人あたり  
乳児死亡率の変化  
(1899年～2014年)

パーセントにすると  
最高18.9%  
⇒最低0.19%  
100年前の100分の1

日本は世界で  
一番乳児死亡率が低い



<http://www.garbagenews.net/archives/1890642.html>

人々が孤立し、社会が解体する時代へ

新たな〈社会〉の時代を構想する必要

=新しい「公共」→自治の新しい形  
→住民が〈社会〉を創造する

新しい〈社会〉の在り方が必要

拡大再生産ではなく

定常的×多元的な  
楽しい〈社会〉を

D. ふるさとを捨てる学力・支える学力

**工業社会=産業社会**

**人を人口として扱う社会**

(重商主義時代以降[1690年代以降]のこと)

**人を道具・手段とする社会**

**人の欲望は所有欲求によって満たされる**

神野直彦『「人間国家」への改革—参加保障型の福祉社会をつくる—』(NHK出版、2015年)

**脱工業社会=知識社会**

**人をその人として扱う社会**

(1980年代半ば以降の消費社会)

**人を目的とする社会**

**人の欲望は存在欲求によって満たされる**

神野直彦『「人間国家」への改革—参加保障型の福祉社会をつくる—』(NHK出版、2015年)

⇐イースタリン(Richard Easterlin)の逆説:

物質所有と幸福感は、  
ある水準を超えると無関係になる

=知識社会の在り方

=若者の物欲のなさが一つの現れ

神野直彦『「人間国家」への改革—参加保障型の福祉社会をつくる—』(NHK出版、2015年)

**工業社会の学力**

**選抜のための学力=人を手段とする学力**

⇒ふるさとを捨てる学力

⇒孤立と競争と依存の学力

⇒人を入れ替え可能にする学力

**脱工業社会の学力**

**共生・生成・変化のための学力**

=人を目的とする学力

⇒ふるさとを支える学力

⇒自立と承認と自治の学力

⇒ひとを固有性として見なす学力



問題は、未だに、孤立と依存から抜け出せないこと

孤立と依存は利己心と疑心暗鬼を生む  
不安な社会

互いに引きずり下ろしあう、下方平準化の社会

イノベーションは起きない

公共財としての〈学び〉は  
社会に他者に対する創造力と信頼を生み出す

人々に対話（ディベートではない）を促し、  
新たな価値をつくりだし続けるよう駆動する

この社会の息苦しさ

価値多元的・個性重視といいつつ  
比較優位をとるように求められる

価値基準がない中での優劣の競争を強いられる

潰しあう

イノベーションは起きず、下方平準化

自己防衛的・他罰的＋依存＋消費者化  
⇒クレーマー化

人々が相互に承認関係を結べるちいさな〈社会〉の形成が重要

コミュニティと「学び」が焦点に

総務省：地域経営組織・地域生活総合支援サービス  
厚生労働省：地域包括ケアシステム  
国土交通省：国土強靱化・防災訓練

文部科学省：コミュニティ・スクール、地域学校協働活動

政府：人生100年時代構想会議  
主要テーマ：学び直し・リカレント教育

どれも「学び」を基盤にしないと機能しない

## E. 存在承認への希求／関係性の存在

### 若者の移動の動向

公民館など地域の活動に熱心に取り組む層には、  
共通して15歳までの地域活動の分厚い体験がある

(東京大学牧野研究室と飯田市公民館との2014-15年度共同研究)

### 若者の移動・コミュニティへの定着

利便性より自然環境  
地域参加意識  
競争より充実  
自然相手の仕事  
仕事が生かされる生活

→ 受け入れられること  
文化的なもの  
地域社会重視

中山ちなみ「若者の地域移動と居住志向：生活意識に関する計量分析」、『京都市社会学年報』第6巻、1998年、p.105、p.106

ふるさとを捨てる学力を  
ふるさとを支える学力に組み換える

相互承認と文化的なかわり  
認知領域の能力は  
非認知領域の能力の基盤において  
大きく展開する

⇒ちいさな〈社会〉をたくさんつくる

## F. ちいさな〈社会〉をたくさんつくる試み

### 東京大学生涯学習論研究室のちいさな〈社会〉づくりの試みの一端

1. シニア世代対象の社会参加促進セミナー事業
2. 地域住民を巻き込む多世代交流型コミュニティの構築
3. 若者と高齢者の文化的交流と  
新しいライフスタイル形成による中山間村の活性化
4. 空き家の活用による地域の人的交流ネットワークづくり
5. 小中高校と地域住民のプラットフォーム形成による  
ふるさとキャリア教育実践
6. 長野県飯田市の公民館と「地域人教育」実践調査
7. 長野県松本市の自治公民館をベースにした  
新しい社会システムの形成
8. スーパーシニアが子どもにかかわるまちづくり事業
9. 自治会単位の地域経営を促す自律分散型社会の構築
10. 神奈川県「かながわ人生100歳ネットワーク」の形成事業
11. 企業と行政のボトムアップの協働による  
新たな役割と市場創出のインパクト・ハブの実験 など

### (1) 公民館活動から次世代育成へ

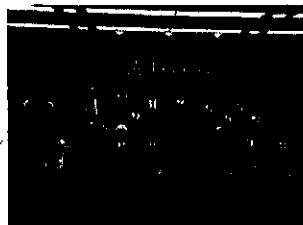
長野県飯田市では公民館をベースにした住民自治によるまちづくりが既に半世紀も展開されており、住民たちが自らの生活の在り方を「公民館をやる」というほどにまで生活と公民館における実践が一体化し、住民自身がともに地域社会を動かし、治め、自らの生活を価値豊かなものへと組み換え続ける実践を進めている。そこではまた、市の職員が公民館主事として、地域での実践経験を積み、それを行政施策へと反映させる循環が形成されている。

さらに、飯田市では、次世代の育成にかかわって、地元の職業高校との連携協働による「地域人教育」が近年盛り上がりを見せしており、高校生がまちづくりの主役へと踊り出てきている。

### (2) 多世代交流型コミュニティの実践

千葉県柏市のある地区で進められているのが「多世代交流型コミュニティ」の実践である。これは、高度経済成長期に開発され、現在急激な高齢化に見舞われている戸建て団地地区をフィールドに、範囲を小学校区に広げた上で、高齢者がその他の世代と交流すること、とくに高齢者が孫世代と交流することで、次世代を育成し、自らがコミュニティの主役となるという、ちいさな〈社会〉をつくりだす試みである。この核となるのが、高齢者が組織する多世代交流型コミュニティ実行委員会と彼らが経営するコミュニティカフェである。

この取り組みを通して、コミュニティカフェには子どもを含めた100名を超える住民が毎日訪れては、交流し、地域活動を展開することで、地域の間人間関係が劇的に変化し、互いに慮る関係がつけられている。また、実行委員会は小中高校・特別支援学校とも連携して、子どもを支え、見守る活動をしており、地域からは「多世代さん」と呼ばれて、地域活動の大黒柱として頼られる存在になっている。



子どもとの交流が活発化  
学校行事を請け負う

子育てに優しい地域との評判  
子育て世代が転入  
学校が学級増へ

高齢者の「終の住処」としての  
コミュニティづくりへ  
不動産の循環プロジェクト

楽しくて仕方がない

⇒多世代さん

「多世代」「たまご」をキーワードに、自分たちの物語を紡ぐ  
「楽しさ」=わくわくする自分をつくりだす

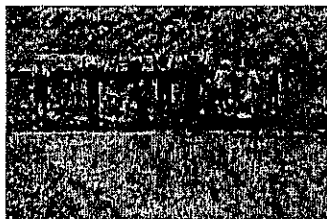
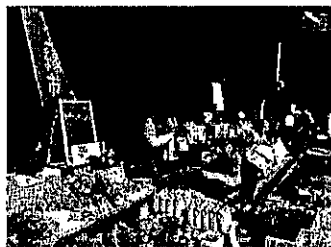
新しい消費社会=わくわく感を贈りあい、自分のものにする

### (3) 若者たちによる中山間村活性化

愛知県豊田市の中山間村で進められている「若者よ、田舎をめざそう」プロジェクトである。急激な過疎・高齢化に見舞われている中山間村に若者たちが移住し、農林業で生活の基盤をつくりつつ、地元の高齢者が伝承してきた文化と若者たちの都市的な文化とを融合させて、新たなライフスタイルをつくりだし、都市に発信することで、農山村と都市とをシームレスに結びつける試みである。

彼らはこの土地で、農林業で自らの生活基盤をつくりだしながらも、スモールビジネス研究会を立ち上げて、さまざまな事業を展開し、間伐材の利用から有機栽培の小麦を使ったお菓子の製造販売、都市民の農業体験プログラム、ワールドキャンパスの誘致、さらにエネルギー自立圏の構想と実験などさまざまな取り組みを進めている。この実験地区は、戸数30、人口40ほど、高齢化率50パーセントであったが、現在では、若者たちの移住と出産で戸数50、人口90、高齢化率30パーセントへと劇的な変化が生まれている。

また新たに、廃校となった学校跡地を地域コミュニティの生活文化拠点とする構想が動き始めている。彼らは、ここでの生活を暮らしと仕事が一体化した「暮らしごと」と表現している。



⇒続々集まる「わかもの」たち

「暮らしごと」をキーワードに、自分たちの物語を紡ぐ  
「楽しさ」=わくわくする自分をつくりだす

新しい消費社会=わくわく感を贈りあい、自分のものにする

豊田市総合計画にも影響

「つながる、つくる、暮らし楽しむまち とよた」

#### (4) 小中高校12年間一貫のふるさとキャリア教育

北海道教育庁が道内14振興局で実施したプログラムで、地元の小中学校と道立高校とを結びつけ、子どもたちの相互交流を進めるとともに、子どもたちと地元住民・経済界との連携を強化して、12年間にわたって子どもたちの成長に住民がかかわることで、自分を育ててくれた地元への理解を深めようとする試みである。「子どもダイスキ」プログラムと「地元ダイスキ」プログラムから構成されている。

このうち、たとえば上川振興局の富良野市を舞台にした取り組みでは、富良野市立小中学校と道立の総合職業高校とが連携し、さらに小中高校生と地元の連携組織である「ふらのみらいらぼ」とが協働して、子どもたちがまちづくりにかかわる仕組みを構築して、子どもを主役にして、おとなや若者たちがそれを支援する取り組みを続けている。

⇒多世代が「混ざる」

「ふるさと」「混ざる」をキーワードに、自分たちの物語を紡ぐ  
「楽しさ」=わくわくする自分をつくりだす

新しい消費社会=わくわく感を贈りあい、自分のものにする

企業の役割は、  
人が人とともに  
社会の主役になり  
新たな社会価値をつくりだすように  
寄り添い、支えること

サプライヤー中心の  
カスタマー・セントリック（形容矛盾）  
からの脱却

### (5) 人生100年時代インパクト・ハブ

これまで自前主義かつトップダウンで進められていた各企業や行政の高齢社会への対応を、相互に協働しつつ、ボトムアップに切り換え、人々を消費者とみなしてサービスを提供する企業・行政の在り方から、人々とパートナーとなり、人々が社会の主役になるのに伴走する企業・行政の在り方を模索する試みを続けている。現在、一部上場企業を含む約40社が組織されている。

この試みでは、企業・行政の在り方が従来の拡大再生産の時代とは決定的に変化していることを見取ることができる。顧客・住民と企業・行政との関係が変化してきているのである。それは、サービスの提供-享受の関係から、ともにコミュニティを形成し、経営する協働・相補の関係への組み換えだといってよい。

そこではたとえば、高齢化が進展する団地で、デベロッパーと住民とがパートナーの関係を結んで、地域生活支援サービスの拠点形成を進めたり、住民が自ら新たなコミュニティ形成を進めたりする活動を不動産会社が支援し、世代間交流が活発になされ、持続可能な団地をつくりだす試みなどの動きを見ることが出来る。

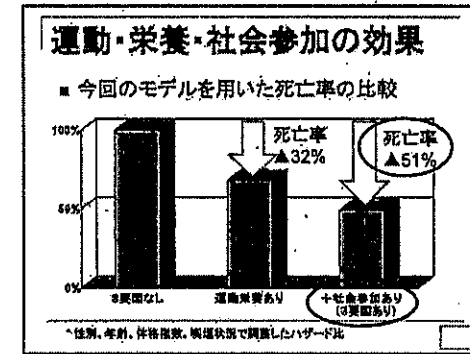
互いに信頼し、想像しあい  
対話して（ディベートではない！）  
新しい価値をつくりつつける  
「間」という場  
⇒ちいさな〈社会〉

## G. 社会保障としての〈学び〉

## H. 〈学び〉の概念の刷新

### 静岡県高齢者コホート研究

【高齢者14,001人の追跡結果】  
の運動・栄養について良い習慣を持つこと、更に社会参加により死亡率が大幅に低下



出典:「静岡県高齢者コホート調査に基づく、運動・栄養・社会参加の死亡に対する影響について」  
2012年、東海公衆衛生学会、平山朋他

「学び」によって  
信頼と想像、自立と自治  
当事者性がうまれる  
ともに生きる感覚が生まれる

人と人の「間」に信頼が生まれる

ニーズは「間」から生まれる関係性のもの

「間」がしっかりすると社会の価値創造力が上がる  
社会的生産性の発展

## 長い箸の寓話

純粹贈与 信頼・信用の社会循環

学校教育：画一的=拡大再生産  
=一方向への線的発展=都市化  
=国家単位=単能工=静的

生涯学習：多元的=持続可能性  
=多方面への空間的展開=郷土化  
=コミュニティ単位=多能工=動的

## 「教育」と「学習」の概念の組み換え

教育：知識・教養を伝達

⇒ ともに考え、探求する

学習：知識・教養を蓄積

⇒ ともに作りだし、変化するプロセス

新しい教育観：アクティブ・ラーニング

⇒ 主体的で対話的な深い学び

⇒ 地域学校協働活動

## 「恩送り」

Pay it forward

先人に思いを馳せ、負い  
まだ見ぬ子どもに返していく

負債と返還 純粹贈与 贈与-答礼  
受動と能動

歴史と社会に自分を位置づける  
信頼と想像⇒自立と自治



〈学び〉：  
人と人との「間」をつくる  
人を人との「間」に存在させる

「間」：  
時空の交わる場所  
自分が人ともにいると思える場所  
人とつながっている=信頼し、想像しあう

I. 新しい学習観、  
そして新しいまちづくりへ

—学校だけで完結しない教育課程—

「間」をつくる：  
社会に信頼を回復し、わくわくを贈りあい、  
躍動する自分を手に入れること  
人ともに新たな価値をつくりつづける。

〈学び〉の組織：  
成員が自分を常に「間」で感じ取り  
リーダーが「しんがり」を努め  
対話的で  
すべての成員が当事者になり  
常に躍動する組織

教育の公共性 → 学び・学習の個性

学び・学習を個人主義的にとらえる  
市場を形成するニーズを個人主義的にとらえる



本来的に学び・学習は社会的なもの  
個人のニーズも、個人主義的には存在しない

関係論的観点の必要：臨教審の陥穽

競争から協働へ

一元化・画一性から多元化・多様性へ

固定した価値から価値の不断の生成・変化へ

リーダーが牽引する社会から  
すべての人がフルメンバーの社会へ

自己責任論による不利益分配システムへ

本来であれば、学習の個別化の背後にある  
社会性・関係論的なニーズのあり方を議論すべき

どうするのか？  
統合ではなく、自由・個別化・個性化と  
それを支える関係性・社会性・相互承認関係

ここに地域学校協働活動の役割がある

## 21世紀型スキル

(アメリカの)小学校入学生の65パーセントは、  
大学卒業後、今ない仕事に就いている。  
(アメリカ・デューク大学キャシー・デビッドソン)

現在の仕事は、2030年に50パーセント  
が自動化され、消える。  
(オックスフォード大学)

だから、すべての子どもたちに、  
豊かな「学び」の機会を保障すべき

- ・思考の方法—創造性、批判的思考、問題解決、意志決定と学習
- ・仕事の方法—コミュニケーションと協働
- ・仕事の道具—情報通信技術 (ICT) と情報リテラシー
- ・世界で暮らすための技能—市民性、生活と職業、個人的および社会的責任

中教審教育課程企画特別部会(2015年8月)

社会に開かれた教育課程  
→教育課程は学校の中だけで完結しない

地域コミュニティとの連携・協働によって  
様々な社会体験を子どもにさせる

社会総がかりで子どもを育て、社会をつくり、経営する

権利を分配される主体としての住民ではなく、  
権利を相互の関係の中で生成し、  
地域コミュニティを分権的に主権化する

住民によるコミュニティ経営へ

子どもの成長を軸に  
学校を核として  
地域総がかりで

社会をつくる

Society5.0時代・人生100年時代の  
社会の人的基盤（すべての社会基盤の基盤）の創生へ  
その基盤としての社会教育・地域学校協働活動  
その基盤としての〈学び〉

